

2-1		主題	認知症高齢者に対する屋上庭園の活用と その効果に関する研究	
テラスの開放		副題	～利用者の笑顔の為に～	
自由に外へ				
研究期間	6ヶ月	事業所	(社会福祉法人) 浴風会 第三南陽園	
発表者：関口 実実（せきぐちふみ）			アドバイザー：丸山 寿量（まるやまとしかず）	
共同研究者：小嶋 信一、弦巻 茂樹				
電 話	03-3334-2596	メール	sora6372@yahoo.co.jp	
FAX	03-3334-2198	URL	http://www.yokufuukai.or.jp/	

今回発表の 事業所や サービスの 紹介	社会福祉法人 浴風会（杉並区）が3番目の特養として平成14年に開設した入所207名、ショートステイ15名の計222名の施設です。「笑顔のある、あたたかく穏やかに過ごせる我が家」「心安らぎ、寄り添い助け合える我が家」の2つのサービス指針を掲げ、サービスを提供しています。
------------------------------	--

《研究前の状況と課題》 特別養護老人ホームでは、様々な周辺症状を抱えた認知症高齢者が生活しているが、なかでも帰宅欲求や外に出たいと願う利用者が少なくない。 当施設でも、同様の訴えが多く聞かれるが、限られた職員の中で実際に外出の機会を設けることはかなり厳しい現実である。 当施設には、フロアに繋がる大きなテラスがあり一見開放的な印象はあるが、回廊式で死角が多く水はけもよくない。また小さなテラスの出入り口に多少の段差があり、車いす一台がやっと通る事の出来る狭いスペースで、テラスに出たすぐ前には大きな花壇が真ん中を占め利用者のすれ違いがやっとという状況にあり、転倒のリスクを負ってまでテラスに出ようとはして来なかった。	《研究の目標と期待する成果》 ケース記録を読み返していくうちに、テラスへ出ると気分が多少緩和されているという事実が明らかになった。 そこで、まずは利用者の生活の場から近く、職員の目の届きやすい小さなテラスを改修し、普段から自由に外へ出られる環境を作る事により、帰宅欲求や「外に出たい」という訴えが少しでも減り、利用者が穏やかに生活出来るのではないかと期待し園庭の改造に至った。
--	---

《具体的な取り組みの内容》

庭園部分の花壇を一部撤去してくつろげる空間を創設するとともに扉を改修して出入りしやすい環境を作り、屋上庭園をフリースペースとして日中開放し、利用者の行動・心境の変化を観察して記録した。

認知症フロア利用者 36 名の中からフロアスタッフが日頃から外出希望の多い利用者や、歩行不安定で歩行介助の際は常に見守りや付き添いが必要な利用者を選出し、本人及び家族により同意を得られた 20 名を対象とした。

対象者自身による主観的心理効果を調べるため、テラスに出る前とテラスから戻ってフロア内に入った直後の 2 回、1～3 段階の顔図から現在の心境を選択していただき記録し、各顔図の番号を点数とし、1 ヶ月毎の平均値により比較した。

表情、笑顔、感情、会話、および行動の落ち着きの 5 項目について、各 3～1 の 3 段階で評価を行った。観察は日常介護に携わっているケアワーカーの目を通して行い、毎日 16:00 に評価し、各利用者の項目毎の毎月の平均を算出し、全利用者の月毎の項目別平均値を比較した。

行動観察の終了後、対象者に対しては口頭にて、職員 18 名に対しては文書によるアンケートを実施した。

床部転倒衝撃緩和工事・花壇撤去工事・ドア改良工事・部材費として 150 万円計上。

《取り組みの結果と評価》

実施直後は利用者の表情もよく、反応は良好だったが、1 日を通しての評価は大きな変化は見られなかった。これは認知症の特性である短期記憶の保持が困難ということから出た結果と考えられる。しかし、アンケート結果からテラスを開放したことは概ね好評だったことが伺える。

《まとめ》

日常的に利用可能なスペースが屋外に確保することで、ストレスの減少及び心身の安定が図られると共に周辺症状が緩和され、表情が明るくなった。

また歩行が不安定で見守りが必要な利用者に対しても自由に動ける環境が増えたことによって心身機能の回復を得ることができた。今回の研究では、調査期間が三ヶ月と短いため大きな評価は得られなかったが、今後も継続していく事により、更なる周辺症状の緩和が期待される。

《参考文献》

ウィキペディア

(2010 年 4 月 8 日「日光浴」で検索)

気象庁ホームページ

<http://www.jma.go.jp/jma/index.html>

《提案と発信》

【メモ欄】追加資料 ☒ 有 ☐ 無